

猫
×
俺



朝起きたら、自室のベッドのうえで猫になっていた。

カフカの「変身」のようで、似て非なる珍妙な状況。

完全に猫と化してはいなく、三角の耳と尻尾がついて、あと長い牙と長い髭が生えただけ。

言葉を話せるのは同じなれど、語尾に「ニャー」がつく。

そしてもう一つ、文学作品とチガウことが。

「おはよう、龍平さん」

自室のドアを開けたのは、見知らぬ男。

吊り目が特徴的なイケメンで、すらりとした体型に輪郭や所作がなめらか。

俺が猫になった挙句、赤の他人の男が不法侵入して、我が物顔でふるまっている！？

なんて、意外と驚かず。

俺の猫化はさておき、男については、どうにも見覚えがあつたから。

飼猫のトラに似ているよーな。

つまり、俺が猫になったと同時に、トラも人になったのではないか。

カクニンするため、単刀直入に男に問うてみると、そのとおりだという。

また、こうなった経緯のような話も聞かせてくれて。

「龍平さんが毎日毎日、仕事が辛そうで心配だったんです。

上司のハラスメントにあって、先輩にはムシされて、同僚には足を引っ張られて、後輩には舐められて・・・。

仕事を辞めたいと云いつつ、決心がつかず、俺を飼いつづけるためにもと、休まず出勤していたのが、見ていて心ぐるしくて。

疲れがとれないようで、ずっと顔色がわるい龍平さんの心身がダイジ

ヨウブだろうか、気が気でなかったし、俺のために辞められないなら、申し訳なくも思った。

だから神様に祈ったんです。

龍平さんの仕事での重圧や重荷を、俺にすべて背負わせてくださいって。

そしたら、神様が叶えてくれたようで、こういうことになったんですよ」

「おまえは分かるとしてニャー、どうして俺は猫ニャー」と聞けば「酔っぱらうと『あー猫になって一日中ごろごろしててえ!』ってよく喚いていたからじゃないですかね」と。

精液まみれのズボンを、変わらず張りつめたまま、頭を混乱させるうちに、息の荒いトラが、俺のＴシャツをめくり、胸に顔を寄せて。一週間、風呂にはいってはなく、体臭がひどいだろうにかまわず、舌で乳首を。

「にやあうん！」と甲高く鳴いて、ざらざられろろと乳首を舐めまわされるのに、にやんにやん喘ぎまくり。

自覚がなかっただけで敏感なのか、舌のざらつきが快感を呼び起こすのか。

なにしろ、胸でヨがるのは男として耐えがたく、第一に猫の鳴き声を交えてあんあんするのが恥ずかしすぎて。

とめどなくお漏らしをしながらも、力のはいらない体で、どうにか抗おうとすれば、トラは胸に顔を埋めたまま、尻尾をにぎった。と同時に「にやひいいい！」と悲鳴をあげ、腰をびくんびくん。

射精しそうになったのを、ぎりぎりで堪えたとはいえ、尻尾が性感帯なのはばれられ。

「ふ」と笑ったトラは、尻尾を強くにぎったまま、先っぽを胸へと。ざらついた舌で乳首を舐めるのを再開し、もう片方の乳首を尻尾でこしょこしょ。

「にやあ、だめえ、なに、これえ、やだあ・・・！は、にやう、し、尻尾で、いた、ずら、しな、にや、にやあ、にやあん、や、やあ、でちや、俺、胸、だけ、でえ、ひにや、いやにやああああ！」